

第277回山口西田読書会(=2021年6月26日開催分)の Protokol

担当:末永

第277回は6月26日(土)にZoom開催され、まず、岡部氏のProtokolを中心に会が進行した。西田が新カント学派の「認識論〔≒知識論〕」を引き合いに出しつつも、「知るといふこと」(西田幾多郎全集〔旧版〕第四巻、212頁)をめぐって西田独自の路線を打ち出していく箇所であった。

そもそも、新カント学派が登場した「19世紀後半は、[……]近代の学問的知識の理論体系への全面的な依存が大きく揺らぎはじめ、新たな知に向かう探求がしだいに活発化してくる時期であった。その動きは、理論的知識の形成の基盤を「直接的に生きられた知としての経験」とみなし、そこに向けて帰り行くことでもあった。もとより新カント学派、とくにリッケルト(1863-1936)のように、生の流動性を感知しつつも、それに対してきわめて警戒的な立場もあり、多様な変化をみせる現実は、それ自体、不定(アモルフ)なものであり、あくまでも概念による認識作用を介して合理的に構成されることによって初めて真の現実であるとみなされた。そのかぎりでは近代の認識論の立場が堅持されているわけであるが、しかしそのことは逆に、生の豊かさを承認せざるをえないことを告げている。だが、時代の大勢は、主観-客観の対立の根柢にある包括的な生の現実への直接的なかわりである経験を知の基盤とみなし、そこへと立ち戻って知の形成の仕方を見なおそうとしたのであり、広い意味での実証性への関心が、論理的構築を最初から優位とみなす伝統的な知の構図を切り崩そうとしていた。〔最終的な立場は違えど、西田の哲学と同じく、〕フッサール(1859-1938)の現象学も、同時代のこうした「実証性への関心」を共有していた(新田義弘編『フッサールを学ぶ人のために』、52-53頁)。

Protokolの報告過程で、とくに、「形式を何処まで押し進めて行っても、所謂形式以上に出ることはできない。真の形式の形式は形式の場所ではなければならぬ」(西田幾多郎全集〔旧版〕第四巻、213頁)という箇所が議論になった。われわれの認識〔≒知識〕を成立させる究極の根柢としての「形式の形式」〔≒認識の「アプリアリのアプリアリ」(西田幾多郎全集〔旧版〕第二巻、344頁)〕という考え方が陥りかねない無限遡行〔≒形式の形式のそのまた形式……〕からの一種の飛躍ないし逆転として、西田は、形式そのものを成立させる「形式の場所」という考えを出すわけであるが、これは、プラトンの『ティマイオス』で登場する「イデアを受取るもの〔≒意識現象を内に成立せしめるもの〕」(西田幾多郎全集〔旧版〕第四巻、209頁)としての場所(コーラ)を、質料論として受け取り直したプロティノスの思想をふまえたものであった。「プロチンは質料の考を徹底して、物体も質料ではない、物の形や大〔き〕さや、種々の感性的性質すら形に属する、真の質料とは形を受取る場所とか、之を映す鏡とかいふ如きものでなければならぬと云った」(西田幾多郎全集〔旧版〕第四巻、166頁)。

西田哲学の思想的展開は、「純粹経験の立場は「自覚に於ける直観と反省」に至って、フィヒテの事行の立場を介して絶対意志の立場に進み、更に「働くものから見るものへ」の後半に於て、ギリシャ哲学を介し、一転して「場所」の考えに至った。そこに私は私の考を論理化する端緒を得たと思ふ」(西田幾多郎全集〔旧版〕第一巻、6頁)と、のちに西田自身によって要約されている。岡部氏がProtokolを担当された講読箇所は、西田における自覚概念の場所論的転回とも言うべき道筋が、新カント学派の認識論との対決やプロティノスの場所論の踏襲という形で見えてくる箇所であった。

【テキスト】

『働くものから見るものへ』、西田幾多郎全集〔旧版〕第四巻、214頁8行目から216頁5行目まで

(=「場所(一)」の第5-6段落)

【テキスト要約】

「場所」論文の第5段落、第6段落は、引き続き、自覚概念の場所論的転回、のちに西田自身によって、「自己が自己に於て自己を見ると考えられる所に、自覚の意味があるのである、場所が場所自身を限定すると考えられる所に自覚の意味があるのである」(西田幾多郎全集〔旧版〕第七巻、88頁)と定式化される自覚概念に表れた「自己というあり方の場所性」(上田閑照『哲学コレクションⅡ 経験と場所』、110頁)が話題になる箇所であった。

最初の段落で、西田は、われわれの認識〔≒知識〕が成立する仕方を考えるにあたり、当時の認識論における「対象、内容、作用」(西田幾多郎全集〔旧版〕第四巻、208頁)の区別を踏襲しつつも、作用を外へと超越する「対象」方向への超越のみならず、作用を内へと超越する「意識の野〔≒我々が物事を考える時、之を映す如き場所といふ如きもの〕」(同書、210, 211, 214頁)の方向への超越を考えている〔≒その極限が「純なる作用の統一として〔の〕我」(同書、208頁)・「作用の統一者として〔の〕認識主観」(同書、214頁)〕。西田によれば、「意識の野は真に自己を空うすることによって、対象をありのままに映すことができる」(同書、221頁)。言い換えると、「全然己を空うして、すべてのものを映す意識一般の野ともいふべきもの」(同書、214頁)に於てのみ、このように自己無化する意識の野に於てのみ、「すべてが単なる認識対象として全然作用を超越したものと考えられる」(同書、214頁)。いわゆる「超越的对象」〔≒ラスクの言う「超対立的対象」?〕を考えることができるようになる。要するに、従来の認識論が前提する「主客対立の考」(同書、215頁)さえも、西田が言うような「意識の空間」(同書、215頁)、すなわち作用を「内に包む」と同時に「対象を容れて無限に広がる」(同書、214頁)「意識一般の野」を想定することによってのみ、十全に理解することができる。従来の認識論が主張する「形相的構成〔≒知るとは形式によって質料を構成することである〕」という考えさえ、「自己自身に於てあるもの」を(「形相と質料との対立」(同書、216頁)まで含めて)「内に包む」(同書、214, 215, 216頁)「意識一般の野」というところから、説明することができる。その意味で、西田はここで、「意識現象を内に成立せしめるもの」(同書、208頁)としての「場所」という考えを出すことによって、新カント学派も含めた従来の認識論そのものの基礎づけを図っているとも言えなくもない。

次の段落では、「場所」論の認識論的テーゼ、すなわち「私は自己の中に自己を映すといふ自覚の考から出立して見たいと思ふ。自己の中に自己を映すことが知るといふことの根本的意義であると思ふ」(同書、215頁)〔≒「自覚の意識の成立するには「自分に於て」といふことが付加せられねばならぬ。知る我と、知られる我と、我が我を知る場所が一つであることが自覚である」(同書、127頁)〕という自覚概念の定式が、まとまった形で提示された。なおこれは、「場所」論の存在論的テーゼ、すなわち「有るものは何かに於てなければならぬ、然らざれば有るといふことと無いといふこととの区別ができないのである」(同書、208頁)という既出の考えとセットになっていることに注意すべきである。

読書会ではその後、「場所」論の認識論的テーゼで問題となる「自己」に関して、これを「統一点といふ如きもの」(同書、215頁)として考えることがどういうことであるのかが話題になった。西田の考えでは、「統一点といふ如きものは知るものと云うことはできない、既に対象化せられたもの、知られたものに過ぎない」(同書、215頁)以上、やはりここでは、前述したような「内に包む」もの、その限りでの「知るもの」が、西田の言う「自己」であると考えざるをえないであろう。なお、「場所」論の認識論的テーゼと存在論的テーゼの区別、および、場所的に捉えられた自己について、上田閑照氏は次のように述べている。「自己が自己に於て自己を見る」とき、「自己が自己を見る」という自己と「自己に於て」という自己との二重性、場所論の術語で言えば「於てあるもの」と「於てある場所」との二重性、どちらかに解消されずまた一つに融合してしまわない質的差異を含んだこの二重性——そして前述の「われ」から出て「われ」に戻る運動がその動態をなすような二重性そのものが「われ」、すなわち「われ」を「われなし」と自覚するような、その自覚としての「われ」に他なりません」(上田閑照『哲学コレクションⅡ 経験と場所』、112頁)。

読書会の最後に、西田がここで言う「無限の系列」（西田幾多郎全集〔旧版〕第四巻、215頁）、「無限に働くもの、純なる作用」（同書、216頁）という事柄に関して、「英国に居て完全なる英国の地図を映す」という企図を手引きとしたロイスの考察が挙げられた『自覚に於ける直観と反省』冒頭の記述に唐露氏が言及し、参加者一同の理解の助けとなった。

【参考文献】

上田閑照『哲学コレクションⅡ 経験と場所』、岩波現代文庫、2007年。
新田義弘編『フッサールを学ぶ人のために』、世界思想社、2000年。